

善光寺

長野と言えば蕎麦と善光寺、オリンピック……。考えてみればそんなに遠くないにもかかわらず、それまで長野を訪れた覚えがない。厳密に言えば行ったかどうか覚えていないといったところであるが、すくなくとも、行っていたとしてもここ数年ではないし、それこそ



撞木造りの本堂

善光寺に行ったことはおそらくない。長野といえば、海に面していない都道府県というのがパッと出てくる。私たちは本来、日本各地の港を見て回っているから、確かに考えてみれば変な話かも知れないが、それでも、まあ寄り道がてらに訪れた長野で、善光寺がなかなか興味深いところであったので書かせて頂きたい。

9月18日、長野で1泊だけするというスケジュールであった。それにもかかわらず到着した時には、あいにくの大雨に見舞われた。それでもせっかく来たのだから、見ておかねばという、私のケチ臭い性格で、大雨の中、傘をさし、カメラを携え、善光寺へと私は向かったのである。善光寺がどうしてそんなに名の知れたお寺なのかということがいまひとつピンときてないので、調べてみると、おそらく無宗派のお寺であるという事が大きな理由であると考えられる。とはいえ、自分の家系が何派なのかということすら把握してない私は、

これがどういうことなのか正直よくわからないのだが、日本で無宗派のお寺というのはまずないみたいである。私より上の世代の人達はそういった宗派などにこだわる人も結構いるようで、逆に無宗派となればいわゆる誰でもウェルカム状態で万人受けすると言ったところなのであろうか。そういう事であるなら結構良いかもわからな



本堂前の香炉



い。もっぱら私のように、そういったことも気にせず、ただ観光目的で訪れる人ももちろん多いとは思う。面白いことに、善光寺が創建されたのは日本に仏教の宗派が生まれる以前であったとされている。善光寺は三国(インド、中国、日本)伝来の日本で初めて仏を本尊とし、日

本仏教の根源であるとまでいわれている。それに加え、かつてほとんどのお寺というのが女人禁制であったにもかかわらず、善光寺は昔から男女の差別がなかったというのも非常に興味深い話である。昔から誰でも歓迎するといった、ある種粋な計らいみたいなやり方がここまで有名になった理由なのかも知れない。

善光寺の本堂はというと、これまた残念ながら撮影禁止であったが、大きくてなかなか立派な本堂である。創建以来、何度も火事に見舞われたものの、その度に信徒達の力によって復興を遂げてきたとされている。本堂の中に「不滅の常明燈」、別の名を「不滅の法燈」と呼ばれるものがある。これは本尊の眉間にある白髪から放たれた光によって点されたと言われており、以来1400年に渡り、絶やすことなく点いているみたいである。大変疑わしい話ではあるが、まあ面白い。この明燈を拝んだものは極楽往生間違いなしとまでいわれている。その他に面白かったのは、「戒壇巡り」である。これは以前に誰かから教えてもらっていて、「善光寺に行くのであればぜひ戒壇巡りしておくといい」とのことだったので、500円払って実際にやってみ

た。戒壇巡りというのは、一光三尊阿弥陀如来像が安置されている床下の回廊を巡るというものである。特別何かがあるというものではないのだが、真っ暗で何も見えない床下を歩くのである。そして、案外知らない人も結構





本坊大勸進の水子地藏

いるみたいであるが、この戒壇巡りの出口付近に錠があり、この錠の真上に本尊がいるということから、これに触っておくと死に際、本尊がお迎えに来て下さると約束してくれるようである。先程の「不滅の法燈」といい、やたら胡散臭いが多いとは思ったが、いざこういうところになると、私の「せっかく来たからには、」という都合の良い理由で、頑

張ってしまうのである。やはり、この戒壇巡りには、いかにも観光客みたいな連中ばかりがこぞって挑戦しており、とりわけお年寄りの観光客が両手であたりを探りながら、ゆっくりゆっくり暗闇の中を歩いているのが見受けられた。私の前を行くおじいさんがなかなか前に進まないで、私の後ろにいるおばあさんの手が私の体を撫で繰り回すのである。わずか45メートルの距離がこんなに長く感じたことはない。それでも出口付近でちゃんと錠に触れることも出来たので、これで本尊が迎えに来て下さるはずである。

善光寺には「牛に引かれて善光寺参り」という説話があるぐらい、牛というのも善光寺を語るうえで、大きなポイントの1つであるみたいである。それゆえ境内ではおそらく2か所で牛の像を見ることが出来るはずである。そのうちの1か所は本堂へ向かう途中の案内所の中で発見した。おそらくもう1か所あるみたいなのだが、そちらは残念ながら見つけれなかった。どこにあったのが未だにわかっていないのだが、母娘でどこか緑の中に佇

んでいるらしい。次行った時には、絶対に見つけない。そもそもこの「牛に引かれて善光寺参り」というのは、信仰心の無い老婆が牛に布を持っていかれ、追いかけていると、善光寺にまで辿り着いてしまったという話である。途方に暮れた老婆がふと足元を見ると、牛の涎で「うしとのみおもひはなちその道になれをみちびくおのが心を」と書かれていたのだという。思い返せば、



「八百屋お七」に纏わるとされる

濡れ地藏



宮城の鹽竈神社でも牛の像があったのを覚えている。あれは牛の涎のように商売が長く続くようにという事で、撫でる像だったと記憶しているが、案外、牛というのは神社、仏閣等で目にする事の多いような存在だったのかもわからない。その他にも「一生に一度は善光寺参り」という言葉もある。これは生きていうちに善光寺お参りしておかないと死んだときにご利益がないということをいっているみたいである。こうしてみると割と、死後にどうなるのかというのが非常に多い気がする。やたらお年寄りの参拝客が多かったのはそのせいかわからない。正直、私としては、「ご利益くださるなら生きていうちにお願ひします」といったところではあるが、善光寺でお参りして、不滅の法燈も見て、戒壇巡りまでしたのだから、これで極楽往生間違いなしである。

前述したように、善光寺を訪れたのは大雨の時であったので、私も傘をさしながら、色々散策してみたのだが、思いのほか、境内は結構広かった。今回はわずかではあるが、境内にあったものや善光寺付近で見つけたものなどを紹介させて頂きたい。

本堂から少し離れたところに大勧進がある。ここにも色々なものがあって面白い。1番目を引くのはおそらく水子地藏であろう。こんなに立派な水子地藏は見たことない、なかなか神秘的で、おまけに水まで噴射している。水子地藏なんて私には一生縁のないようなものだとは思うのだが、その存在感は神々しかった。あとは濡れ地藏というものもある。歌舞伎や浄瑠璃の題材にもなった「八百屋お七」の冥福を祈り、恋人で会った吉三郎が造立したと言われている。この「八百屋お七」というのは火消しに恋をしてしまい、彼に会いたいがゆえ、江戸を大火事にしてしまったことから、火あぶりの刑に処された女性である。どうしてその地藏が長野にあるのかが分からないが、面白い話である。濡れ地藏のすぐ近くには六地藏というものもある。これは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天という我々衆生が輪廻を繰り返す6つの世界に現れ、迷いや苦しみから救ってくださる菩薩様達である。

善光寺の近く、表参道を歩いていると、いわゆる「モダン」な洒落た建物があらわれた。これは THE FUJIYA GOHONJIN というブライダルなどもやっているようなレストランで

ある。元々は1648年に創業された「御本陳藤屋」が始まりであったようである。「本陣」というのは一般的に江戸時代に大名や勅使が宿泊した施設のことをいう。通常は「本陣」と書くが、この「御本陳藤屋」に関しては「陳」という字で間違いではないと



のことである。「御本陳藤屋」というのは加賀藩前田家の参勤交代の常宿であったといわれている。まさか参勤交代の時代にまで話が遡るとは考えてもみなかった。1892年に対旭館と称して、木造数奇屋造りの三層楼が建築され、この頃から大胆で優美な欧風の要素を多く取り入れはじめたのではないかともいわれている。伊藤博文や福沢諭吉などの著名人も羽根を伸ばしに訪れたというほどである。1925年についてアールデコ調の和魂洋才の建物に変わる。この際の大工事には、なんと善光寺の仁王門の再生建築にも指名されたというほどの大工が行ったようである。その後の時代、どういったことがあったのかという事があまり見つけられなかったのだが、平成に入り、長野新幹線の開通や高速道路の整備などにより、かつては長野に宿泊で訪れていた観光客が日帰りするようになったという。2006年に、創業以来続けてきた宿泊業を休業するという道を選び、新たにブライダル事業を柱にしてスタートさせた。それでも300年以上という長い歴史が続いているということは、きっと創業以来、変わらず持ち続けた「おもてなし」の精神があったからゆえではないだろうか。

長野に来たからにはやはり蕎麦を食べておかないわけにはいかない。「信州信濃の蕎麦よりもあたしゃあなたのそばがいい」というクサすぎる都々逸が存在するぐらいである。長野に来たからにはやはり蕎麦を食べておかなければならないということで、夜は長野の蕎麦を堪能しようと考えていた。しかし驚くことに善光寺に近い表参道にあるような蕎麦屋はだいたい午後の2時ぐらいにはどこも閉まってしまうというのである。遅くて、5時までというのだから驚きである。それでもなんとかタクシーの運転手さんに探してもらって、表参道あたりであいている蕎麦屋を見つけてもらった。かどの大丸という蕎麦屋だったのだが、なんせあいている蕎麦屋を探すのに必死すぎて、見つけられた安堵感からか、あまり味を覚えていないのである。きっと美味しい天ぷらそばであったと思う。次回はもう少し

時間にゆとりをもって、長野を満喫し、美味しいお蕎麦をもう一度堪能したい。

今回は、長野 1 泊のみという予定であったので、夕方からの散策となった結果、結局駅から歩いてまわれるところぐらいしかみられなかった。まだまだ全然長野を満喫しきれていない。考えてみれば、長野と言えば山である。海はないが、地図で見ると、長野は見事に山だらけである。私自身、山が嫌いな事もないので、次回は登山も兼ねて長野を再チャレンジしたい。あとは、やはり軽井沢もある。あいにく別荘はないのだが、まあ行って雰囲気だけでも味わえたらと考えている。

ウェバー伊安